

# 教養部

教養部長挨拶



教養部管理棟



教養部外観

## Message

教養部は湯島キャンパスより総武線およびバスで50分ほどの市川市郊外にあり、緑豊かな江戸川沿いの文教地区・国府台の一角にあります。国府台という地名の由来は、下総国府が置かれたところから付けられたものです。高度な人材を輩出する使命を果たすべき本学の立地が、湯島キャンパスは昌平坂学問所の跡地、国府台キャンパスは下総国府ゆかりの地という学問・文化に根付いた場所にあることは、単なる偶然ではないように思えます。

本学教養部は1965(昭和40)年に国府台に設置されました。しかしそのルーツは古く、本学が1946(昭和21)年に旧制大学へ昇格した時期に、茨城県稲敷郡安中村に設置された大学予科にあります。その後、大学予科は1950(昭和25)年に他大学である千葉大学に移管され、大学予科の廃止、進学課程の設置を経て、1958(昭和33)年に国府台の地に本学の国府台分校が開設され、基礎教育から医学教育までのすべてを本学自身で行えるようになりました。そして1965(昭和40)年に部局に昇格し、現在の教養部が誕生しました。

本学へ入学して最初の1年間は、国府台キャンパスにて教養を中心に授業を受講します。自分の志した医学・歯学の専門領域を究めることは大切なことですが、狭い範囲の価値観だけに縛られては、実社会の中の「答えのない難問」を解決できません。近年、この「答えのない難問」は、AIなどのテクノロ

教養部長  
**檜枝 光憲**  
Mitsunori Hieda



激動の時代を  
乗り越えていくための  
教養教育とは

ジーの急激な発達、グローバル化、未知の感染症のパンデミック等により加速度的に増加しております。よって、それらの難問解決のためには、幅広い知識を持ち、さまざまな角度から物事を考えられる柔軟で自由な思考が必要となります。本学教養部では、学びに対する意識改革、基礎学力の保証、グローバル教育の推進、を3本柱とした教養教育を実践してきました。必修科目の他に、少人数教育、充実した選択科目、PBL教育、英語で学べる科目など、全国の

医療系大学の中で屈指の充実度を誇っています。さらに最近では、現代教養とも言うべきAI・データサイエンスなどの授業も設定されています。教えられたことを暗記するだけの学びからモード転換し、自らが主体的に学び、基礎力や教養を身につけながら広い視野を獲得し、「答えのない難問」に対応できるだけの素養と学びの態度を是非とも養って欲しいと考えております。

ご存知のように2024年10月に本学と東京工業大学は統合し、東京科学大学が発足します。私達はまさにこの激動の歴史の中に身をおいています。両大学の強みである医歯学と理工学のコラボレーションによって、社会に対する新しい価値の創出や、地球規模の課題に対する解決法の提案など、相乗効果により何が生まれるのでしょうか。わくわくすると同時に、構成員としてその責任に身の引き締まる思いです。また、そのような価値を創造する若い担い手を育てていきたいと考えております。

私は、若い皆さんには何事にも大いに挑戦し、たくさんの失敗をし、そして決して諦めないで進み続けてほしいと願っております。それらの失敗が将来の成功の糧になり、夢を実現するための力となると信じているからです。私は入学時に若い皆さんにネルソン・マンデラ氏の言葉を贈っています。「生きるうえで最も偉大な栄光は、決して転ばないことにあるのではない。転ぶたびに起き上がり続けることにある」。

1996年電気通信大学電気通信学部卒業。2001年同大学院電気通信学専攻修士課程修了。2001年ペンシルベニア州立大学理学部研究員、2003年名古屋大学大学院理学研究科助教、2008年同大学院理学研究科講師を経て、2015年より東京医科歯科大学教養部教授。2021年同大学副理事(教養教育担当)、2022年同大学教養部長に就任、現在に至る。





東京医科歯科大学 名誉教授

**中島 ひかる**

Hikaru Nakashima

### 教養部の30年

私は1991(平成3)年4月に教養部に着任し、2022(令和4)年3月に定年退職しました。31年間勤めたこととなります。教養部の30年を振り返ると、常に時代や情勢の変化(ハード)に合わせて教育内容(ソフト)を更新してきました。今後は、東京科学大学という新たなハードの枠組みの中でのマインドの変化が、今までにない研究の創成を生むことが期待されます。



Petit Palais (ブティ・パレ:パリ市立美術館)

1987年3月東京大学大学院仏語仏文学専攻博士課程単位取得後満期退学。1991年4月～1998年3月東京医科歯科大学教養部助教授、1998年4月～2022年3月同大学教養部教授。2011年8月～2014年3月同大学学長特別補佐(評価担当)。2014年4月～2022年3月同大学副理事(目標・評価担当)。

本稿では、1991年4月から2022年3月までの教養部の変遷をカリキュラム、建物、学生気質等の側面から振り返ります。1991年当時の学生は、2022年頃には研究での活躍が大学のホームページやFacebookに掲載されるようになり、また大学の様々な役職を務めるようになって、東京医科歯科大学の中核で活躍しています。

### ハードとソフト

人間の考えることは、時代や空間が異なってもそうは変わりません。ギリシャ・ローマの古典や16世紀英国のシェイクスピア、あるいは平安時代の『源氏物語』が現代でも読み継がれ、再解釈されて映像化・舞台化され人気を博すのも、人間の本质が時代を経て大きく変化することがないからでしょう。一方、人間を取り巻く環境やツールといったハード面の変化には著しいものがあります。

20世紀は相対性理論、量子力学等の物理学の発展により、宇宙の見方や戦争の在り方が変化しましたが、21世紀は分子生物学が脚光を浴びるようになり、ゲノム配列の解読等人間の内宇宙の探求へと関心が向かいました。そして今は情報革命の時代といわれています。

情報革命は、日常的なツールの変化を伴うので学生の教育面や生活面への影響も見えやすいものになります。固定電話、カセットテープの語学教材、ワープロ専用機、百科事典や地図も含めた紙媒体資料、定期券やバスチケットが消え、最近ではテレビ受像機、CDプレイヤーを持っていない学生も増えました。そして現金を使う機会も随分と減少しました。

人間の本质は変わらなくても、ハードの変化に合わせてソフトである教育内容も進化しなければ、人間がこの時代に相応しく、自分を活かしながら生きていくのも難しくなるのではないのでしょうか。その意味で、教養教育が現在でも意義を持つためには、時代のニーズに合わせて教育の変革を怠らない大学と教員の努力に負うところが大きいと思われる。

### 教養カリキュラムの変遷

1991年当時、既に数学では情報教育の重要性が指摘さ

れ、旧校舎のコンピューター室でプログラミングを教え始めていましたが、その流れはその後加速し、現在ではデータサイエンス教育に発展しました。それと並行して、数学では「情報リテラシー教育」も早くから導入し、情報セキュリティにも注意を促してきました。

現代社会における国際化の要請という情勢の中で、2012(平成24)年に「グローバル人材育成推進事業」の申請が採択され、教養部を中心に人文社会科学科目の英語化が要請されたときには、人社系からの猛反発がありましたが、英語分野のサポートもあり、2016(平成28)年から英語による人社授業「グローバル教養科目」群を導入し、熱心な学生からの支持で受講者も順調に伸びました。

英語は自主教材の開発、ネイティブスピーカー教員の積極的な採用、TOEFL/ITPによる能力別クラス編成等、国際化に対応するための努力を常に怠らない一方で、「教養」としての英語教育も重視し、学生が語学は流暢だが中身の無い人間に終わらないよう留意してきました。

第二外国語も、1990(平成2)年に初めてフランス語の専任教員が着任しましたが、国際社会における中国の台頭の中で、2011(平成23)年には中国語とスペイン語も選択可能になり、2012(平成24)年には中国語は専任教員が着任したことで現代社会に相応しく選択肢を多様化してきました。第二外国語は語学授業の枠内で地域事情・文化の情報を与えるように努めてきましたが、これは新カリキュラムの「国際地域文化入門」につながっています。

2011年度には「教養総合講座」を創設し(2021(令和3)



グローバル教養総合講座のグループワークの様子

年には「グローバル教養総合講座」として英語資料を読んだディスカッション等も取り入れた科目に再編)、全学科横断で学生が討議しながら一つのプロダクトを作り上げる過程を体験させてきました。その教育経験や歯学科連携教育の中で試行してきた「サイエンスPBL」は、2017(平成29)年、自然科学系における講義と実験という従来の枠組みを超えた「サイエンスPBL入門」の導入にもつながりました。全学の教育委員会「新教育2000年委員会」で、かつて東京女子医科大学におけるPBL教育の見学が行われましたが、自己問題提起・解決型のPBL教育の重要性はその後、全学的にも定着したと思われます。

保健体育も、以前からTFAS(Total Fitness Analysis System)による自己管理プログラムを開発してきましたが、2022年には新任教員の着任に伴い、現在注目の「ウェルビーイング」の枠組みに再編されました。この科目は人間の健やかで幸福な在り方という概念の中に位置づけられています。

学部進学後の医学科・歯学科に対しては湯島キャンパスでも「主題別選択」をはじめとする教養教育を行ってきました。週1コマ50分の「主題別選択」は短時間ではありますが、学部専門教育の合間にまったく毛色の異なる文学等の授業を受けることができ、少人数クラスでは教員と、あるいは学年を超えた学生間のコミュニケーションも充実していたため、楽しみにしている学生も多かったようです。新カリキュラムでは、この「主題別選択」が1年次の「教養基礎セミナー」として継続されるとともに、旧カリキュラムの



化学実験



医学科・歯学科3年次対象「主題別人文社会科学セミナー」は、ELSI(倫理的・法的・社会的課題: Ethical, Legal and Social Issues)をテーマに全学科の2~4年混合で実施する「教養セミナーⅠ・Ⅱ」に再編され、学年・学科を超えたディスカッションという精神が発展的に受け継がれています。

### 国府台キャンパス

教養部の最寄り駅であるJR市川駅周辺では南口周辺で大規模な再開発が行われましたが、キャンパスのある国府台周辺は30年間あまり変わっていないように思われます。蕎麦屋、喫茶店、フルーツ店、洋品店等がいつのまにかすべて調剤薬局に変わって、ますます周辺の飲食店が減ったことぐらいしか変化はないようです。2012年には、以前から学生の要望も多かったコンビニエンスストアがキャンパス内に開店しましたが、代わりに、生協食堂はなくなり学生にとっては昼食代がやや高つくつことになっています。

教養部の建物についていえば、1996(平成8)年の校舎棟(ヒポクラテスホール)の完成で老朽・狭隘化した既存講義室・実験室の抜本的改善が行われた後、2013(平成25)年秋からは管理研究棟の全面的な改修工事も行われ、長年の懸案事項であった中規模教室増加の問題もある程度解消しました。こうしたハード面は絶え間なく改善されており、授業を受ける環境は随分と整いました。1991(平成3)年当時は冬はボイラーで部屋を暖めていましたが、ボイラーマンが16時に勤務を終えるので、17時までは余熱で暖かいものの、18時までである5限は皆コートを着て授



正門から見るヒポクラテスホールと管理研究棟

業を受けており、学生からは高校より環境が悪いとの不満が聞かれました。

学生曰く「私物という概念が成立しない」里見寮も、1995(平成7)年に全面改修され近代的な施設に生まれ変わりました。里見寮はキャンパス内にあるのに入寮者の遅刻が多く、留年率も高いと教員の間では言われていたましたが、旧制高校的な雰囲気も残し、学生やOBにとっては思い入れの深い場所でもあったのではないのでしょうか。逆に、かつては最新の建物であった、国際交流会館(留学生および女子学生向け寮)の老朽化が今は問題になっています。

### 学生気質の変化

学生の顔の見える小規模な教養部であったからこそ、教員の学生への接し方も画一的なものにならず、「子ども」を見ているような親近感が生まれました。教養部の教員が教育熱心なものそこに一因があると思われま

昔は授業を担当を頼んでいたのに欠席し、友人が「彼は今、雀荘です」というのは日常茶飯事で、海水パンツに実験着を羽織って授業に現れた学生もいました。ただ一見いい加減でも皆高い志があり、教員もそれを分かって学生との信頼関係の中でそのような風潮を許容していたように思われます。その後、外部評価でも「成績評価の厳格化」が要求されるようになり、出席管理も厳しくなると、教員の許容度も低くなり、学生の意識も「単位取得」が変わっていったのかもしれませんが、今、勉強はできて当たり前、だから勉強せずに遊んでいる風に見える、あるいは勉強以外のことができるのが「偉い」という風潮は、大学よりむしろ一部の進学校に残っているように思われます。しかし、そのあたりは「真面目な努力」を嫌うエリート意識にもつながりかねず、フランスの最高教育機関の一つであったENA(国立行政学院 École nationale d'administration)への批判でも、同様の事がしばしば指摘されています。教員・学生共に新しい時代に合った新たな関係性を築いていかなければならないのでしょうか。

### 2つの大災害

この30年の間に、日本は東日本大震災とコロナ禍を体験



コロナ禍における法皇塚古墳前広場での昼食風景

し、教育のハード面への影響も小さなものではありませんでした。大震災後しばらく計画停電が続きましたが、今考えれば、地震発生が3月初めだったこともあり、入試・教育への影響は当時考えたほど大きくなかったかもしれません。それよりも、2020(令和2)年4月からコロナ禍で自宅待機となり、突如、今まで経験したことのないZoom授業が始まったときは、教員も学生も大いに困惑しました。幸い学生が優秀なこともあり、Zoom授業はあっという間に定着しましたが、コロナ禍によるハード面の変革は極めて大きかったと考えています。昔LL教室で行っていた授業が今は個人レベルで可能になったほか、結構な抵抗があった歯学部主導の授業録画も、Zoomの導入で否応なく当たり前なこととなりました。Zoomは今、国際会議も含めた会議の他、疫学研究のインタビュー調査にも使用されています。これは学生を含めPCの個人所有というハード面でのインフラ整備が進んだ時代だったからこそ可能になったものでしょう。それでも、この2年間、対面での授業に制限がかかったことは特に初年時の学生にとってはマイナス面が拭えず、その中で、感染対策を講じて何とか実験等の最低限の対面授業を行おうとした教員・事務方の努力は大変なものでした。

### 新時代への期待

東京科学大学の誕生で、ハード面での教育の枠組みや学生交流が大きく変化することになります。現在、急ピッチでカリキュラム再編も進んでいると聞きますが、大学生



東京藝術大学卒業制作作品(トシノカラス)と桜

活、特に入学直後の教養教育においては、授業内容そのものもさることながら、むしろ、最先端で仕事をしている先生方のインパクトや、その周辺で知的興奮を味わっている先輩や同級生との交流が大きな影響力を持つと思われる。ストリーミングで多くの体験ができるようになった今の時代だからこそ、かえってリアルタイムでの実体験の重要性は大きくなっていないのでしょうか。教員が自らの研究を本気で面白がって行っていることは、自ら学生に伝わり、それは効率や利益の範疇を超えます。東京工業大学との統合で環境が変わることによって、新たな刺激が生まれ、学生のマインドの変化が新たな研究の創成につながる事が期待されます。

最近注目されているピアニストの角野隼斗氏は、開成高等学校を卒業し、東京大学大学院情報理工学系研究科修士課程を修了しています。音楽家としては異色の経歴の持ち主ですが、登録者数130万の人気YouTuberでもあります。ゲーマーとして中学の頃から高速プレイ動画をアップしていましたが、コロナ禍でしかたなく配信ライブに力を入れたら登録者数が増え、ピアノで食べていけると語っています。20代後半のこの世代は、軽々と伝統的なジャンルの因習や境界を越え、本人には国際舞台に挑戦という気負いもなく、世界からオファーが殺到しています。医療系の研究においても、新たな世代は、眩しいまでの若さと軽快さで、学問や世界の壁を軽々と乗り越えていくのでしょうか。